

ヴァレリーの詩における 「海」のテーマについて (I)

井上富江

(序)

長い間、ヴァレリーの詩を読んできた。

その難解さの中から、今まで木のテーマを見てきた。「木」のテーマをみていく過程で、ヴァレリーの詩の中であって、視覚的イメージ—あるいは、イメージを効果として扱う事—への依存は、無視できないものであると感じた。そこにあるのは、ボードレールに端を発するいわゆる象徴主義の「音」^(音)と「匂い」と「色」という観念からおしはかれる視覚というものはるかに超えたものであった。

例えば“Palme”の中の一節

La substance chevelue
Par les ténèbres élue
Ne peut s'arrêter jamais,
Jusqu'aux entrailles du monde,
De poursuivre l'eau profonde
Que demandent les sommets.

(v.v.65~70)

“An Platane”の中の一節

Le tremble pur, le charme, et ce hêtre formé
De quatre jeunes femmes,
Ne cessent point de battre un ciel toujours fermé,
Vêtus en vain de rames.

(v.v.25~28)

に描かれた「木」はただ枝をひろげ、風に枝をふるわせる単純な存在ではない。枝は、空をはい、少しずつ空を侵略してゆく一方、根は、その分だけ、地に穿孔し、地を侵略する。空に手をひろげるだけ、地をは

いいつも、枝と根と相称されて描かれる。しかも、枝々は、その階調を同じくして、左右に、枝を拡げていく。その例をあげれば枚挙にいとまないが、この小論の中で展開しようとするのは、もちろん「木」のテーマではない。視覚的イマージュの効果が、かくも大であることを感じるにつけ、私は、もう一つ大きなテーマ「海」の中に描かれるイマージュを考えてみたいと思った。「巫女」のテーマや「蛇」のテーマなどと共に、ヴァレリーの詩の中であって、そのテーマのはたす役割は大きい。「海」のあらわすもの、そして、その視覚的構成を、何とか、探り、おぼろげながらもその輪郭をつかみたいと思う。そんな願いにとりつかれて、又もや、この難解な詩に首をつっこむことになった。

。 。 。

ヴァレリーの生地は、海に見える、美しいセート(Sète)の町であり、彼自身の墓も今このセートの町にある。地中海沿岸のこの町に、よく生まれたと彼自身幾度も語っていたという。この町で、海を眺めるのが、何よりも好きであった少年時代より、ヴァレリーの心の中で、海は、その姿を大きく育てていった。ヴァレリーと海とは、切り離せないものになっていた。見るともなく眺め、きざまれた記憶は、いつも大きな力をもっているものであるから……。

しかし、ヴァレリーの場合、この海への愛着が、ただ単なる憧憬や、詠嘆に終わることは決してない。被写体が心の中に投じた感動を、詩的興奮状態においたまま、創作する詩人であれば、それは云えたかも知れない。しかし綿密に、被写体の与える感動を、より透明な意志の光の中に照らし、置き換え、詩を組みたてていくヴァレリーの場合、それは適応できない。“Hoslinato rigore” (あくなき厳密)を愛し、レオナルド・ダ・ヴィンチ方法叙説への雄感の中で語った次のような言葉をみればそれはすぐに納得できる。

「探求より探求に進み、きわめて容易に、常に自己の本性のより一層見事な馬術師になる。自分の思考を際限もなく訓練し、注視を練磨し、行為を発展させる。…(中略)…自分の意志と能力との対応を緊密にし、芸術中に自分の推理を押し進め…」夢想状態に於かれたままで、詩を構成するということは、彼にとっては「真の詩人」とは程遠いものであった。

それでは、一体「海」は、ヴァレリーにあっては、どういう意味をも

ち、どういう効果をあげるものとして使用されているのであろうか。

。 。 。

まず、「海」が各々の詩の中にどう使われているのか、みていこう。
その全てをあげるわけにもいかないの、その主要部分だけ、みていく
ことにしたい。

Remonte aux vraie regards! Tire-toi de tes ombres,
Et comme du nageur, dans le plein de la mer,
Le talon tout-puisant l'expulse des eaux sombres,
Toi, frappe au fond de l'être! Interpelle la chair,

(Air de Semiramis. vv.13-16)

この場合の「海」は、眠りの中にひろがる闇の中で、魂は自らの肉体
にせまろうとする。今まさにめざめようとする魂を包む、奥知れない暗
がり。しかし、この闇は、同時に魂の躍動を準備する、大きな存在でも
ある。

Commence……Et le vent semble au travers d'un linceul
Oudir de bruits marins une confuse trame,
Mélange de la lame en ruine, et de rame……
Tant de hoquets longtemps, et de rales heurtés,
Brisés, repris au large……et tous les sortes jetés
Eperdument divers roulant l'oubli vorace……

(La Jeune Parque vv.316-321)

「海」は、狂暴たる、運命の翻弄者となり、くずれ落ちる白浪のもの
すごい響きの中に、懊悩と、混濁は、衝突し、碎けて、激しく、ゆり動
かされる。ゆったりとした平静から一変したこの荒々しさは、逃れよう
逃れようとする魂を、容赦なく、打ち砕き、せめさいなむ。「海」とい
う流動体は、ここで、この上ない無秩序を展開する。「安定した大地」
に対して使用された「海」は、あくまでも、狂おしい混乱と渾沌を、表
わすものでなければならなかった。ここで「海」は、ただ単なる闇とし
ての存在ではなく、又広々とはてしなくひろがる「静」なる存在でもな
い。大地と隣りあわせている不安定な、動揺し続ける思考である。暗澹
と、底しれない深い淵であり死にも通ずるものである。明晰なる叡智を
こなごなに打ち砕き、ちりぢりに沖へと運びさる、大いなる存在として

「海」は、この上ない効果を發揮する。かつての「木」のテーマでは、人間は「根」にしばりつけられ、身動きできない「木」としての宿命をもつことが、問題であった。しかし、「海」では、逆に、何もささえがない為に、転々と、運命のままに投げ出され、さまよう人間の姿が、うかび出て来る。しかし、「海」のテーマのもつ意味は、それだけには、とどまらない。「木」のテーマの中で見た、風にこたえ、あるいは激しく、あるいはやさしくゆれる、葉の、枝の、幹の音の階調は、「海」の中では、もうみられないのであろうか。ヴァレリーが、象徴主義を、標榜する限り、やはり、音の効果を考えずに「海」のテーマを探ることはできないであろう。

。 。 。

Que songes?……Si je viens, en vêtements ravis,
Sur ce bord, sans horreur, humer la haute écume,
Boire des yeux l'immense et riante amertume,
L'être contre le vent, dans le plus vif de l'air,
Recevant au visage un appel de la mer;

(La Jeune Parque (vv.496-500

Dans une bouche où sa forme se meurt,
Je hume ici ma future fumée,
Et le ciel chante à l'âme consumée
Le changement des rives en rumeur.

(Le Cimetière Marin vv.27-30)

この両者にみられるように、「海」は、一方では「生」を、他方ではたち騒ぐ「動揺」を呼びおこすものとして、表現される。

前者においては、生へとひたひたと、よせるやさしい音の波を運ぶ。死のうとしたパルクの耳もとで鳴る「生」の音として、これほどおおしく、たくましい存在はない。

一つの音の波が、又次の波を呼び、その波が又波を呼び、その音は、どんどんふくらんでいき、ついには、つんざく風の音を消していく。暗くひろがった墓場であった海が、暁の光と共に、趣を変える。運命を翻弄していた波が、今度は、「生」を呼びおこす、絶え間ない呼びかけとして使用される。後者の場合は、又違った意味で「海」は主要な役割を

はたす。海をはるかにみはるかす墓地にいて、詩人は一人、深い広大な海を眺めている。底しれぬ深みが、やがて詩人の胸に、魂の消滅について考えさせる。

平静であった心の中に、たちさわぐ動揺を表わす音、それが、ざわめき、たかなる波の音であった。前者の場合、動揺から、希望へと、たち直らせた音は、後者において、不安と焦燥を伝える。打ちよせる、波が高鳴れば高鳴るだけ、その不安と焦燥は、いたたまれないものになる。

海は、変幻自在であり、時々はその姿を変える。ある時は、ひたひたと、やさしく、ある時は荒々しく高く飛び散る。その各々が、生を呼びおこすもの、激動へとかりたてるもの、運命をもてあそぶものとしての役割をになう。人間の心の動きと密接に、つながっていく。いうなればヴァレリーにあっては、波のモデュレーションの中に、人間の心の動きを表現していったといえるだろう。そのモデュレーションへの美しい伴奏がこの波の階調音であると云える。

。。。

さて、今ここで、「海」のテーマについて考える時、絶対に忘れられない詩を詳細にながめてみたいと思う。いうまでもなく「海の墓地」"Le Cimetière Marin"である。L・J・オーステンの研究によって今では、その製作段階を詳しく知ることができるようになったが、その研究によれば、この「海の墓地」も「若きパルク」の場合と同じく、詩の全体の構想があって、その各部分が、同時に、まちまちに書き始められ、附加されていったという、彼の頭の中に、生地、セートの墓地があったことは、彼自身が幾度(11)も明言しているし、その墓地からの眺めへの愛着も、彼自身が入れたこの詩への挿し絵をみれば、今さら議論の予地のないところである。そこで、私が今しなければならぬことは、この製作順序を云々でも、細かな字句の解説をすることでもない。このすばらしい詩の中で、一体「海」は、どう使用されているのかということである。

まず海を見下す丘に、墓地がひろがっている。そして空と、海が相対している。この単純な背景から詩が流れる。

Ce toit tranquille, où marchent des colombes,
Entre les pins palpite, entre les tombes;
Midi le juste y compose de feux

la mer, la mer, toujours recommencée!
O récompense après une pensée
Qu'un long regard sur le calme des dieux!

(Le Cimetière Marin vv. 1~6)

墓地の墓が、屋根のように、太陽の光を受けて光っている。^{註(12)}と、一瞬のうちに、それは、キラキラと輝きほほえむ波の輝きに変わる。屋根のハトは、船の帆に移っていく。

海と墓地とは全く相等しいシメトリーを構成していく。ちょうど線対称をなしているように、墓地と海がお互いに姿をうつしあう。

Fermé, sacré, plein d'un feu sans matière,
Fragment terrestre offert à la lumière,
Ce lieu me plaît dominé de flambeaux,
Composé d'or, de pierre et d'arbres sombres,
Où tant de marbre est tremblant sur tant d'ombres;
La mer fidèle y dort sur mes tombeaux!

(Le Cimetière Marin vv.55-60)

墓地に高くそびえる糸杉は、まるで燃えんばかりの焔をあげ、真昼の太陽の炎に照らされ焼かれている海に対比する。

ここに又、ヴァレリー独特のイメージがある。海は、はてしなく、決して区切ることとは不可能だと思われる。しかし、ヴァレリーにとっては海は無限の存在であると同時に「葉陰のとりこ」となった「囚人」でもある。木立や葉の間から見える海は、まるで牢にとらわれの囚人とも見えるのであった。相矛盾するイメージ、「無限の存在」と「葉ごもりに区切られた存在」として、とらえられ、描かれる。このような対比は、又次のようなところにもあらわれてくる。

Tout est brûlé, défait, reçu dans l'air
A je ne sais quelle sévère essence……
La vie est vaste, étant ivre d'absence,
Et l'amertume est douce, et l'esprit clair.

(vv.69~72)

現実には、真昼の太陽によって照らされている海が、^{註(14)}空中に蒸発していく元素として描かれている。即ち、ここで、輝かしい生物が、「物質

の変化という、非人間的循環現象の中の一つの制限された弧しか占めていない。」ということが明らかにされる。

さんさん註(15)とふりそそぐ太陽の光、詩にあらわされる光景は、そのまま我々を太陽に照らされる海に視点をおかせる。即ち、これ以上、輝かしい「生」はない程偉大な光の中に「無」——即ち「死」——を見る。この描写こそヴァレリーの視点を明らかにするものであり、「海」のイメージをとらえる上で、重要な働きをするものであると思われる。相対と絶対との対立、小さく区切られた部分と、無限の拡がり。全く相反する概念が、ヴァレリーの詩の中では、隣りあわせて現われてくる。一見対立し、矛盾する概念が、裏をかえせば、一体をなすものなのである。「海」は太陽の光という生を受ける存在であると同時に、元素へと解体作用をうながす蒸気を放出するものでもある。存在するということが、それが、不在にも通ずるものであるということを実に現わしている。

Les derniers dons, les doigts qui les défendent,
Tout va sous terre et rentre dans le jeu!

Et vous, grande âme espérez-vous un songe
Qui n'aura plus ces couleurs de mensonge
Qu'aux yeux de chair l'onde et l'or font ici?
Chanterez-vous quand serez vaporeuse?
Allez! Tout fuit! Ma présence est poreuse,
La sainte impatience meurt aussi!

(Le Cimetière Marin vv.95—102)

「海」は、放出され、元素となり、やがて又地下に入り、再び、新たな生をうける準備をする。「『死』そのものも、詩人にとって、自然の摂理であり、何ら、心を騒がすものではない。」「海」という肉体を離れて、意識のみが元素として飛翔註(17)しているかに見えるが、完全に離れることはない。ただ抽象的な思考の遊戯をむさぼりつづけようとするだけである。自然の循環作用の中で、飛翔する魂を、「海」をいう被写体の中で、描きだそうとしているヴァレリーの意図は、次の節ではっきりと明示される。

Non, non! Debout! Dans l'ère successive!

Brisez, mon corps, cette forme pensive!
Buvez, mon sein, la naissance du vent!
Une tralcheur, de la mer exhalée,
Me rend mon âme……O puissance salée!
Courons à l'onde en rejaillir vivant!

(vv.127～132)

意識の遊戯をうち破る、波と風。飛翔する魂は再び「海」の中に再生し、生命ある肉体として、生き生きと描きだされる。太陽の光によって解体された存在は、清新な風に送られ、同じ太陽の光のもとで、こんどは、「生」の讃歌を歌う。吹き起こる風に呼びおこされた波は、欣喜躍り、ながら、冒頭で、うたわれた、墓をもうちくたく。

。結び。

「海」というのは、おそらく空と共に広々と見はるかす、一見この上なく単純で、又この上なく自由なる存在である。この上なく、千変万化であり、それ故に擬人化され、人間の平静と懊悩、混濁と清濁等の状態を附与していく。

「海は、ヴァレリーにとって砂漠ではなく、定められた目的から、自己を自由に解き放つ孤独であり、人間の存在を、各々、別的人格であるということに認識するに十分ふさわしい孤独である。」と云われるように海はその広大さ故に、人間の思考をかきたてるものである。全く自然のままの、絶え間なく鳴りひびく波の音に、ヴァレリーは、逃れよう、逃れようとする焦燥感を感ずる。盲目的に逃れようとする衝動は、定められた運命への反逆であり、魂に宿る、あいまいもことしたものの不安と焦燥である。この逃れよう逃れようとする焦燥感がある故に、又、再び「永劫回帰」の不条理も生まれてくる。いとも非人間的自然現象へとヴァレリーを導いた視点も、この中に含まれている。逃れようとする波が又、打ちよせる。この永久にうち破れない律動に無秩序と、法則を、同時に見る。静止と激動、平穏と嵐、透明と混濁、人間の心の動きそのままに、ヴァレリーの心の中で「海」は様相を変える。

運命の道を開き塞ぐもの。希望をかきたて、虚無へと導くもの。ヴァレリーは、「海」の中に即ち、これら、相矛盾するものを全て含み、なお

かつ、律動をやめない「海」に、自分自身の、そして人間の孤高な魂を写し出そうとしたのであった。さざ波の階調音は、その時々々の魂の状態に、適応し、美しい詩を構成していく。空と海、海と墓、これらヴァレリー独自のシメトリーは、いやでも、視覚的な広さとかがやきを知覚させる。

空は海を、海は空を写し、海は墓を、墓は海を写す。お互いのイメージを二重写しにしながら展開していく。「海」は水の透明さ、水の深さを十分に生かして、その鏡の上に詩を展開する。

ヴァレリーは、一面では、人間の魂を、又一面においては、こうした構成上のおもしろさを「海」の中に表現したものだと思われる。この小論の中で、詩を中心として展開していったものを、次の機会には、その散文や、Cahiers の中に見ていきたいと思っている。

- 註(1) 詳細は、「フランス文学論集」(1969年九州フランス文学会刊)中の拙文「ヴァレリーの詩における『木』のテーマについて」を参照されたい。
- (2) この海への愛着は、N・R・E(1930年3月1日号)の中に発表した“Regards sur la Mer”の中に次のような文章で語られている。「私は、海を見るときも眺め、或いは内裡に、声なく注視して、どんなに多くの時間を使い果たしただろう…云々」
- (3) この言葉はレオナルド・ダ・ヴィンチの座右銘であったという。
- (4) Paul Valéry: Œuvres, Tome I, Notes et pigression, Bibl. de la pléiade, Gallimard, 1957, p.1212
- (5) Ibid:Ausfujet d'Adonis. p.436
- (6) Ibid: Air de Sémiramis. p.91
- (7) Ibid: La Jeune Parque. p.105
- (8) 註(7)の詩の少し前の部分に
Et toute avec herreur à son pacte natal, cette terre si ferme
atteint mon piédestal. (vv.312~313)があり、この“cette terre si ferme”をさす。
- (9) P.Valéry : Œuvres,op cit, p.110
- (10) Ibid:Le Cimetière Marin, p.148
- (11) Austin M.L.-J- Paul Valéry compose le “Cimetière marin”

Mercure de France, avril, mai 1953

中に詳しい説明がある。

- (12) P.Valéry: Œuvres, op cit, p.147
- (13) Ibid: p.149
- (14) Ibid; p.149
- (15) P.F. Benoisの註による
- (16) P.V.aléry: Œuvres, op. cit, p.150
- (17) P.Valéry, Paésies Choisies, Lib. Hachette p.78 Hubert Fabureau の註による。
- (18) P.Valéry: Œuvres, op. cit, p.151
- (19) Paul Valéry vivant, Cahiers du Sud, 1946, p.310